

椋本南方遺跡（3次）・松山遺跡（2次）
発掘調査報告

2012（平成24）年12月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、三重県津市芸濃町に所在する椋本南方遺跡第3次・松山遺跡第2次の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の調査は、高度水利機能確保基盤整備事業に伴い、三重県教育委員会が三重県農水商工部から依頼を受けて実施した。
3. 発掘調査の経費は、その一部を国庫補助金を得て三重県教育委員会が負担し、他は三重県農水商工部から経費の執行委任を受けた。
4. 調査の体制等は次の通りである。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
 - 調査研究Ⅰ課 課長 森川常厚
主査 谷口文隆

土工受託機関 有限会社西武緑化
調査期間 平成23年9月14日～平成24年1月12日
調査面積 榎本南方遺跡 769m²
松山遺跡 98m²
5. 調査にあたっては、地元自治会をはじめ、三重県農水商工部、津農林水産商工環境事務所、津市教育委員会の協力を得た。
6. 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課が行い、本書の執筆・編集は谷口文隆が行った。
7. 当地は平面直角座標系第VI系に属しており、本書での方位は座標北を使用している。
なお、座標値は世界測地系2000に基づいて表示している。
8. 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
9. 土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行の『新版標準土色帖(21版)』による。
10. 本書では、以下のように遺構の略記号表記をしている。

S D : 溝 S K : 土坑
11. 遺構検出時に出土した遺物は、便宜上包含層からの出土とした。
12. 松山遺跡について、三重県埋蔵文化財センターが行った昭和62年の発掘調査を第1次とし、今回の調査を第2次としたが、平成17年にも芸濃町教育委員会により発掘調査が行われている。

目 次

I	前 言	1
1	調査に至る経過	1
2	文化財保護法等に関する諸手続	1
3	調査経過.....	1
II	位置と環境.....	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III	遺構.....	5
1	椋本南方遺跡A区.....	5
2	椋本南方遺跡B区.....	5
3	椋本南方遺跡C区.....	5
4	松山遺跡D区.....	17
IV	遺物.....	17
1	椋本南方遺跡A区.....	17
2	椋本南方遺跡B区.....	17
3	椋本南方遺跡C区.....	17
4	松山遺跡D区.....	18
V	結 語.....	20

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図	3
第 2 図 遺跡地形図	4
第 3 図 調査区位置図	4
第 4 図 棕本南方遺跡 A 区遺構平面図	6
第 5 図 棕本南方遺跡 A 区土層断面図	7
第 6 図 棕本南方遺跡 B 区遺構平面図	8
第 7 図 棟本南方遺跡 B 区遺構平面図	9
第 8 図 棟本南方遺跡 B 区土層断面図	10
第 9 図 棟本南方遺跡 B 区土層断面図	11
第10図 棟本南方遺跡 B 区土層断面図	12
第11図 棟本南方遺跡 C 区遺構平面図	13
第12図 棟本南方遺跡 C 区土層断面図	14
第13図 松山遺跡 D 区遺構平面図	15
第14図 松山遺跡 D 区土層断面図	16
第15図 出土遺物実測図	18

表 目 次

第1表 出土遺物観察表.....	19
------------------	----

写 真 目 次

写真図版 1 棟本南方遺跡 A 区調査前風景、棕本南方遺跡 A 区全景	21
写真図版 2 棟本南方遺跡 B 区調査前風景、棕本南方遺跡 B 区全景	22
写真図版 3 棟本南方遺跡 C 区調査前風景、棕本南方遺跡 C 区全景	23
写真図版 4 松山遺跡 D 区調査前風景、松山遺跡 D 区全景	24
写真図版 5 棟本南方遺跡 A 区小穴群、棕本南方遺跡 B 区小穴群	25
写真図版 6 松山遺跡 D 区小穴群、出土遺物	26

I 前 言

1 調査に至る経過

三重県農水商工部農業経営室による地域活性化プランの施策である高度水利機能確保基盤整備事業が津市芸濃町北神山地区においても推進されることになった。この事業の照会を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、事業地には存在が既に知られている椋本南方遺跡と松山遺跡が含まれているため、昭和62年度県営圃場整備事業に伴い県教育委員会が行った文化財範囲確認調査の結果をもとに、両遺跡の保存について県農水商工部と協議を開始した。その結果、工事掘削深度が遺構に影響を及ぼす範囲があることが判明したため、椋本南方遺跡で769 m²、松山遺跡で98 m²について発掘調査を実施し記録保存することになった。また、工事掘削深度が遺構に及ぼす影響が軽微な600 m²については、工事立会を実施した。

なお、この調査は平成23年4月1日付で公共事業総合推進本部事務局長より依頼され、実施したものである。

2 文化財保護法等に関する諸手続

文化財保護法（昭和25年法律第214号）および三重県文化財保護条例（昭和32年条例第72号）にかかる諸手続は以下のとおりである。

○ 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第1項

・平成22年9月1日付 津農環第1390号

三重県知事から三重県教育委員会教育長あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（里ノ内、椋本南方、松山遺跡）

○ 三重県埋蔵文化財保護条例第48条第2項

・平成22年9月15日付 教委第12-4073号

三重県教育委員会教育長から三重県知事あて

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」（里ノ内、椋本南方、松山遺跡）

○ 文化財保護法第99条第1項

・平成23年9月14日付 教理第177号

三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて

「埋蔵文化財発掘調査の報告について」

○ 文化財保護法第100条第2項

・平成24年1月19日付 教委第12-4418号

三重県教育委員会教育長から津警察署長あて
「埋蔵文化財の発見について（通知）」

3 調査経過

調査の開始に先立って、9月16日に県農水商工部と現地協議を行い、調査範囲、排土置き場、調査基地の設置場所、工程等の再確認及び調整を行った。

調査区が4カ所に分かれるため、椋本南方遺跡を西からA区、B区、C区とし、松山遺跡をD区とした。

調査は工事計画と調査計画の調和を図るため、工事立会から行った。600 m²を対象に10か所で工事掘削深まで掘り下げ、遺構に与える影響はないことを確認し、工事立会は終了した。

発掘調査について、まずA区から実施を開始した。10月17日に重機による表土除去を行い、10月24日～27日の期間で人力による包含層及び遺構掘削を行った。28日には写真撮影後実測に入り、11月2日にA区の調査を終了した。

続いて4日より、排土の関係上、C区の調査に入った。4日に重機による表土除去を行い、8日と9日の両日で人力による包含層及び遺構掘削を実施した。10日には写真撮影及び実測を行い、C区の調査を終了した。

引き続きD区の調査に入った。14日と15日の両日で重機掘削を行い、17日に人力による包含層及び遺構掘削を実施した。18日には写真撮影後実測に入り、21日には実測を終え、D区の調査を終了した。

最後に、B区の調査に入った。25日～12月6日の期間で排土置き場への入り口を残して重機掘削を行い、9日～13日の期間で人力による包含層及び遺構掘削を実施した。13日には排土置き場入り口の掘削を重機及び人力で行い、全ての掘削を終了した。14日に写真撮影をした後、19日にかけて実測を行った。20日にB区を県農水商工部に引き渡した。

II 位置と環境

1 地理的環境

棕本南方遺跡(1)は津市芸濃町棕本ほかに、松山遺跡(2)は津市芸濃町萩原ほかに所在し、両遺跡は隣接している。津市芸濃町は三重県の中央部に位置して、伊勢平野の西端にある。鈴鹿山脈の南端は布引山脈につながり、両遺跡の南西には、南部鈴鹿山脈^①の最高峰、経ヶ峰が、北西には急峻な錫杖岳がそびえ、それをつなぐように500～600 mの山々がつながっている。河川は一般に背後の山が浅く、流域もせまい。中勢北部で最大の安濃川は、鈴鹿山脈錫杖岳付近に端を発し、標高820mの経ヶ峰の山峠を縫うように流れ、芸濃町忍田付近で平野部へ抜け出している。さらに左岸の見当山丘陵、右岸の半田丘陵といういだらかな丘陵の間に沖積平野を形成しつつ流れ、30kmの流域で伊勢湾に注いでいる。棕本南方遺跡、松山遺跡は、その安濃川を忍田地区より2 kmほど下った平野部の左岸段丘上、棕本集落の南方に広がる安濃川に向かう緩やかな斜面に立地し、現況は水田、海拔は50 m～55 mである。

2 歴史的環境

縄文時代に関して、安濃川沿いでは、上新田遺跡(3)、雲林院青木遺跡(4)、北奥遺跡(5)、大石遺跡(6)、赤坂遺跡(7)、榎田遺跡(10)、多門遺跡(11)、棕本南方遺跡で、石器、あるいは縄文土器等が出土し^②、川沿いに広く生活圏が広がっていたことが考えられる。大石遺跡では、中期末の石組炉をもつ堅穴住居と北陸系を含む縄文土器が発掘された^③。雲林院青木遺跡では、中津式の双耳壺を埋置した土坑などが検出されており、後期初頭に属する中津式の安定した資料が出土している^④。また北奥遺跡では、流域最古級の土器となる早期の高山寺式押型文土器が出土している^⑤。

弥生時代に関しては、安濃川下流に前期から終末期まで長期にわたって大規模な集落を形成していたと考えられる納所遺跡があり、安濃川流域ではこの納所遺跡を拠点として、中期から後期にかけて小規模な遺跡が広がりを見せたと推定されている^⑥。興遺

跡(8)、栢井戸遺跡(9)、馬屋町遺跡(12)、榎田遺跡、多門遺跡などがあり、河川沿いの沖積地から河岸段丘上にかけて広く分布している。榎田遺跡から中期の土器が出土しており、この時期に弥生人によるこの地区への開発が着手されたものと考えられる^⑦。

古墳時代に関して、安濃川中流域では、中沢古墳群(13)、竹之内古墳(14)、鳩の上古墳群(15)、松山古墳(16)、大屋塙内古墳群(17)、宮谷古墳群(18)、東山古墳群(19)、諸谷古墳群(20)があるが、それらはいずれも下流に存在する古墳群に比べ群集規模は小さいといえる。また古墳自体の規模も横穴式の円墳が主で、後期のものと考えられる。竹之内古墳から出土する須恵器や土師器が、6世紀後半から7世紀初めであることからも、このことが実証されている^⑧。

古代に関して、ここ安濃川流域においても条里制が行われた。『四天王寺文書』に「忍田里」があらわれ、現在も大字としてその里名が用いられている^⑨。また、鈴鹿閣と伊勢神宮を結ぶ古道は、棕本南方・松山両遺跡近くで安濃川を越え、芸濃町棕本の位置する段丘に上って鈴鹿閣を指向したと考えられ、鈴鹿・市村の両駅の中間にあたる当遺跡周辺にも駅家が推定されていた^⑩。また当地では、弥生時代の遺跡とされている馬屋町遺跡があるが、「馬屋町」という小字とその位置から、この地に駅家を推定することが可能となりえる^⑪であろう。これらから、当遺跡は古代の交通の要所であったものと思われる。

中世に関して、大石遺跡では、区画施設を伴う複数の掘立柱建物が確認されたほか、「僧器」「侍器」「国枝」「包松」などの特徴ある墨書き土器も出土しており、侍層などの地域有力者層の居館かと想定されている^⑫。また、室町時代から戦国時代にかけての居館である野呂氏館跡(21)では、類例の少ない蒸風呂遺構が確認されている^⑬。一方、雲林院の西方丘陵には雲林院城(22)がある^⑭。室町時代に安濃郡を支配した長野工藤氏の一族、雲林院氏の軍事拠点とされるところであり、その東の台地一帯は雲林院氏の居館跡と伝えられている。そして包長、包是、政盛という雲林院の代表的な刀工の存在^⑮も想定されており、中世に

おいても歴史的に注目を集める地域であるということが言える。

近世に関して、芸濃町内の主要交通路は伊勢別街道となる^⑨。東海道閣の東の追分から楠原、椋本通り、江戸橋で伊勢街道に合流する椋本を南北に縱貫する参宮道であるが、中世より楠原宿を中心に繁栄したとされる。その繁栄も江戸時代に入ると椋本宿に移ったとされ、椋本の街道沿いには旅籠をはじめ、古い街並みが今も残されている。

[註]

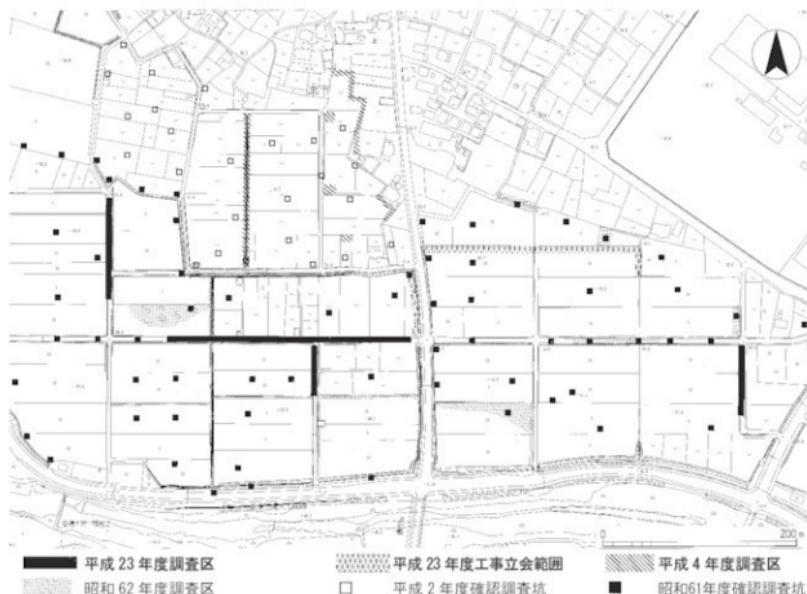
- ① 芸濃町教育委員会『芸濃町史上巻』1986年
- ② 芸濃町教育委員会『芸林院脊木道路発掘調査報告』2005年
- ・ 芸濃町教育委員会『北奥道路発掘調査報告』2003年
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『安濃川流域の考古資料』2006年
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『赤坂道路発掘調査報告書』1991年
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『和浦道路・椋本南方道路ほか』1993年
- ・ 芸濃町教育委員会『三重県安芸郡芸濃町道路分布地図』2002年
- ・ 津市教育委員会『三重県津市道路位置図』2011年
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『平成3年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊』1992年
- ④ 芸濃町教育委員会『芸林院脊木道路発掘調査報告』2005年
- ⑤ 芸濃町教育委員会『北奥道路発掘調査報告』2003年
- ⑥ 前掲①と同じ
- ・ 三重県教育委員会『納所道終・道場と道物』1986年
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『納所道終・道場・土器・木製品編』2012年
- ⑦ 前掲①と同じ
- ⑧ 前掲①と同じ
- ・ 上田正輔『探跡 古代の道 第二巻』法藏館 1998年
- ⑩ 前掲②と同じ
- ⑪ 前掲③と同じ
- ⑫ 芸濃町教育委員会『野呂氏細野発掘調査報告書』1984年
- ⑭ 三重県教育委員会『三重の中世城郭』1976年
- ⑮ 前掲①と同じ
- ⑯ 前掲①と同じ



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)【国土地理院「椋本」1:25,000より作成】



第2図 遺跡地形図 (1:10,000)



第3図 調査区位置図 (1:5,000)

III 遺構

1 棚本南方遺跡A区

A区は、棚本南方遺跡西方の南北に走る農道に沿って埋設されるバイオラインの埋設箇所に設置している。そのため調査区は農道の西端及び水田の畦上にある。基本層序については後世の擾乱が激しく確認できないが、道路上から、アスファルト、碎石、巨石を含む客土となり、検出面に至る。検出面は、北部では道路下 140 cm で黄褐色の、中南部では黒土、あるいは黄褐色砂質土にあたるなど安定していない。調査区内では擾乱が深いため、確認できた検出面自体も相当削平されていることが予想される。

調査の結果、溝 1 条と小穴が複数検出されたが、狭小な調査区のため、遺構の全体を把握するのは難しい。SD 1 は土坑状で、埋土から中世前半の土師器鍋と土師器皿の小片が出土している。小穴については、山茶椀、中世以前の土師器が出土したものが 4 基あるが、その性格は定かではない。

遺構からの出土は少ないものの、遺構検出時には、綠釉陶器、須恵器、灰釉陶器、青磁、白磁、山茶椀、土師器等、古代及び中世前期の遺物が小片であるが出土している。

S K 2 調査区南部で検出した、検出面からの深さ 40 cm の土坑とした。擾乱の影響のため、南へどの程度広がるかは分からぬが、埋土から平安時代の土師器片が検出された。埋土は、土坑南部でにぶい赤褐色、またそれを切るように土坑北部で黒砂質土があるため、複数の土坑が重複している可能性がある。土坑上には、にぶい黄褐色土層があり、その層の中に集石がみられる。集石は半円状を呈しているが、大きさや長径の向きなど統一性がないため、組まれたものではないと考えられる。その直下に、厚さ約 7 cm の淡黄砂と約 4 cm の暗青灰粘土の層がある。暗青灰粘土には鉄分の沈殿があり、非常に堅い層となっている。両層とともに北に向かって徐々に薄くなり、集石の北端付近で消滅している。集石は土坑を伴うものではなく、また直下の SK 2 も関連しないものと考えられ、調査区が狭小なこともあり、その形態や規模、性格は不明である。

2 棚本南方遺跡B区

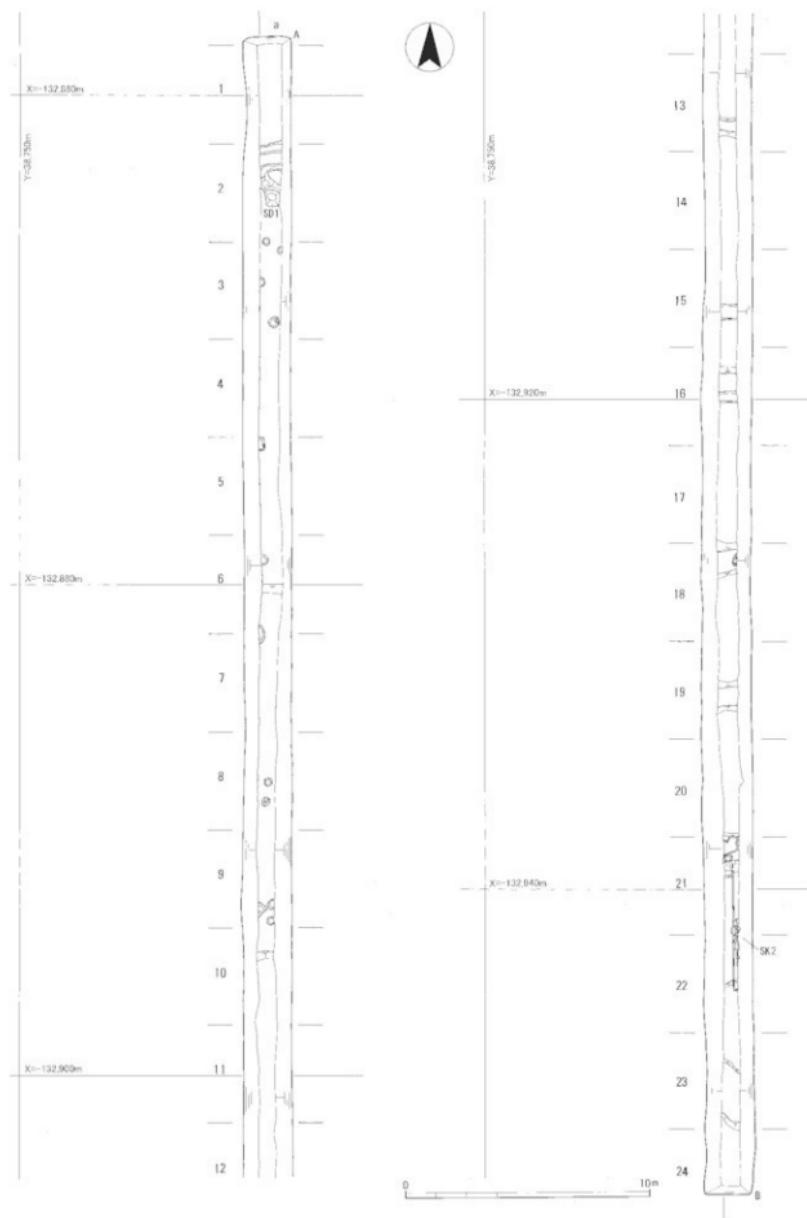
B区も A 区と同じく、農道の北端及び水田の畦上に設置している。後世の擾乱を激しく受けしており、確認できた検出面は削平されていることが予想され、基本層序は確認できない。道路の上から、160 cm の深さで黄褐色土または明赤褐色土の検出面となる。また調査区中央部には、砂礫あるいは砂質土を含む流路が幅およそ 90 m にわたって見られる。

調査の結果、溝 3 条と土坑 2 基、そして複数の小穴が検出された。SK 2 は流路上の検出であり、奈良・飛鳥時代の土師器皿の小片が出土しているものの、遺構かどうかは疑わしい。SD 1 からは、古代の甕、山茶椀、近世以降の陶器が出土しており、埋土の状況と現在の舗装道路の進行方向に沿っていることから、近世以降の擾乱溝であると考えられる。SD 3 からは平安時代のロクロ土師器や台付皿が、SK 5 からは古代の土師器皿が出土しているが、小片・少量であり、土坑の性格や時期決定には至らない。小穴群からは古代の土師器片が出土しているが、検出面の幅がおよそ 80 cm と狭く、柱跡と考えてもどのような規模の建物であったかまでは確認できない。その他、表土からも山茶椀が数点出土している。

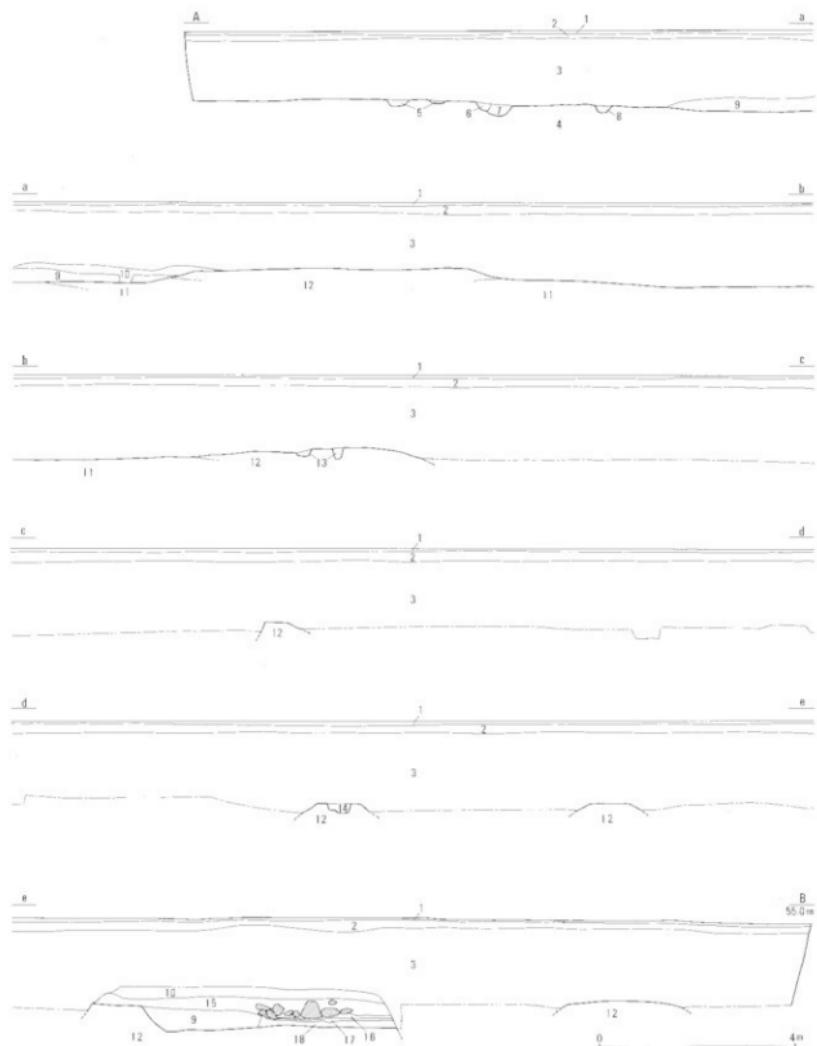
S D 4 調査区中央やや東で検出し、当初東西に延びる幅 2 m の溝と考えられた。掘削の結果、複数の小穴が数個の石を伴って見られた。埋土は暗灰土であり、その埋土からは小穴の前後関係は分からぬ。石の大きさは、大小さまざまで、配置も並べられたようには思えない。室町時代の土師器皿口縁部が出土したが、この遺構の性格は不明である。

3 棚本南方遺跡C区

C区もバイオラインの埋設箇所に設置しており、農道の西端及び水田畦上にある。やはり後世の擾乱の影響で、確認できた検出面も削平されていることが予想される。明確な遺構も検出されず、遺構から出土した遺物はない。遺構検出時には奈良時代の土師器片、ロクロ土師器、山茶椀、室町時代の土師器羽釜など出土したが、いずれも小片で少量である。

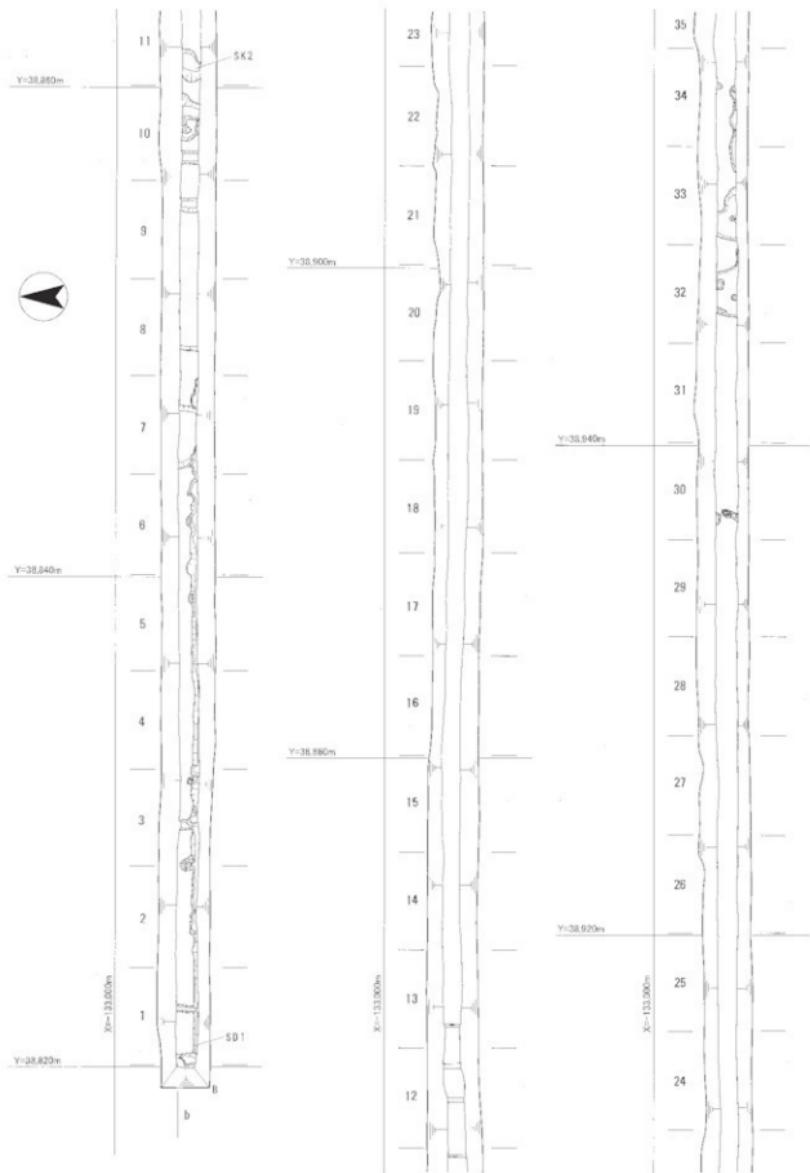


第4図 桂本南方遺跡A区遺構平面図 (1:200)

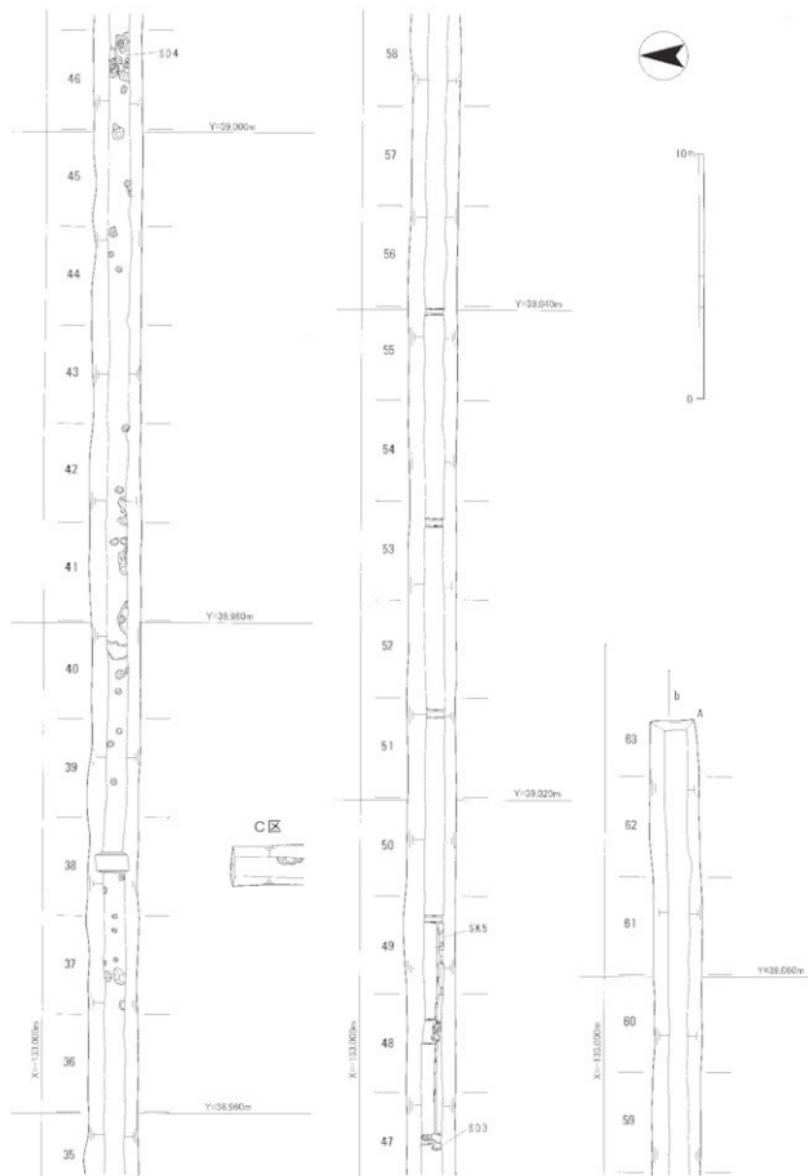


- 1 黒灰アスファルト<1.0kg 6/1>
 2 青灰鉆石<1.0kg 5/1>
 3 深い黄褐色泥岩土<1.0kg 6/4>（露面）
 4 黄褐色砂礫<1.0kg 5/6>（横断面）
 5 黑土<3/1, 5>
 6 黑砂質土<1.0kg 1, 7/1>
 7 黑土<7, 5Y 2/1>（SB1 堆土）
 8 黑褐土<1.0kg 2/2>
 9 黑砂質土<7, 5Y 2/1>
 10 黄褐土<1.0kg 5/6>
 11 黑土<1.0kg 2/1>（露面）
 12 黄褐砂質土<1.0kg 7/8>（横断面）
 13 黑褐土<1.0kg 3/3>
 14 黑褐土<1.0kg 3/4>
 15 深い黄褐土<1.0kg 4/3>
 16 浅黄砂<5Y 8/3>
 17 帽青灰粘土<5B 3/1>（鉛分沈殿・非常に堅い）
 18 深い黑褐土<5Y 4/3>

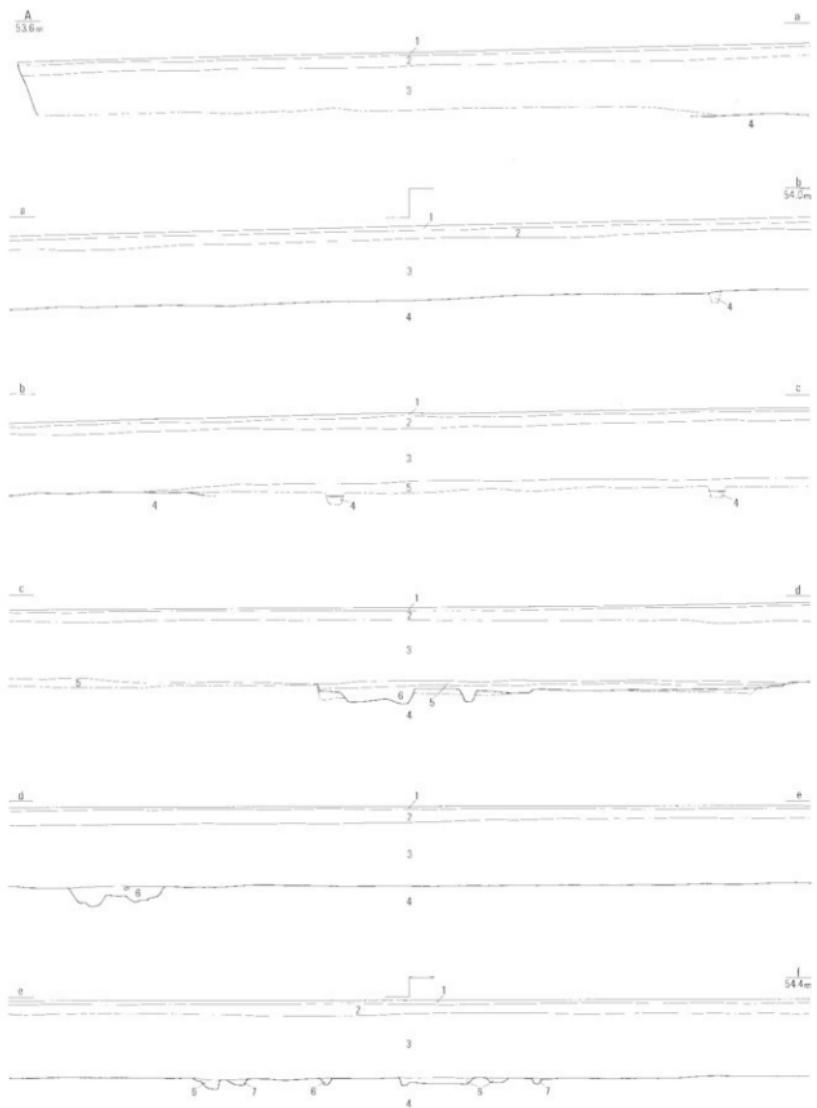
第5図 株木南方遺跡A区土層断面図 (1:100)



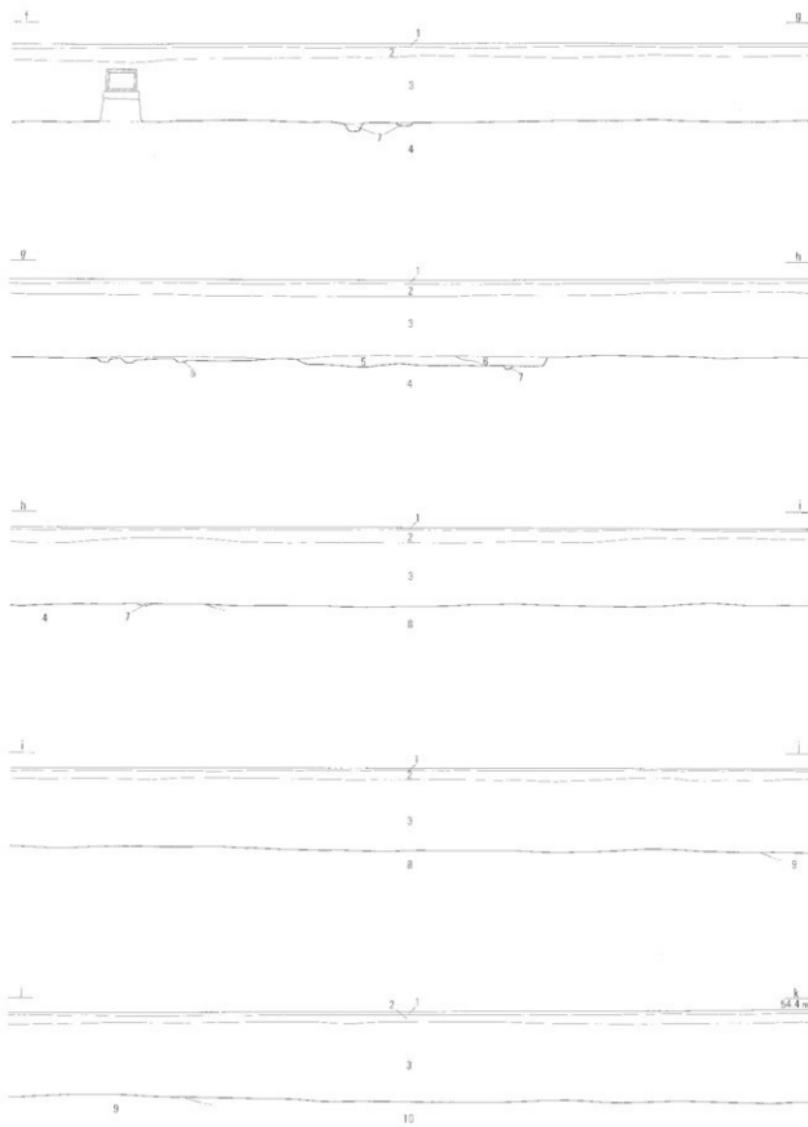
第6図 棕本南方遺跡B区遺構平面図① (1:200)



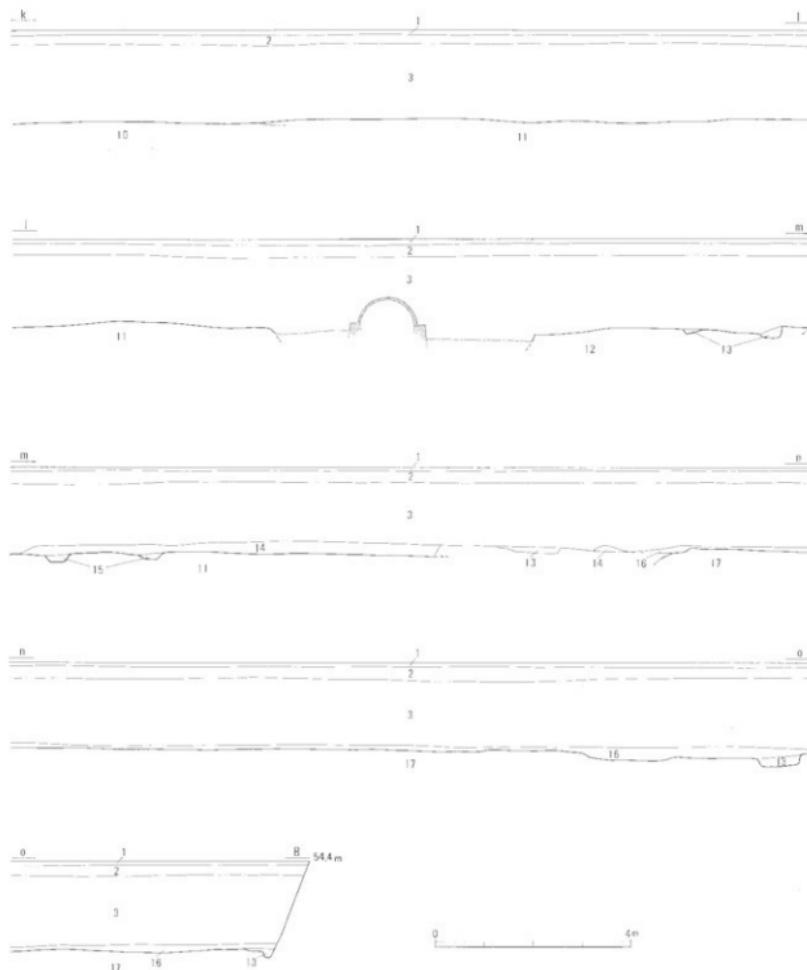
第7図 棕本南方遺跡B区遺構平面図② (1:200)



第8図 棕本南方遺跡B区土層断面図① (1:100)

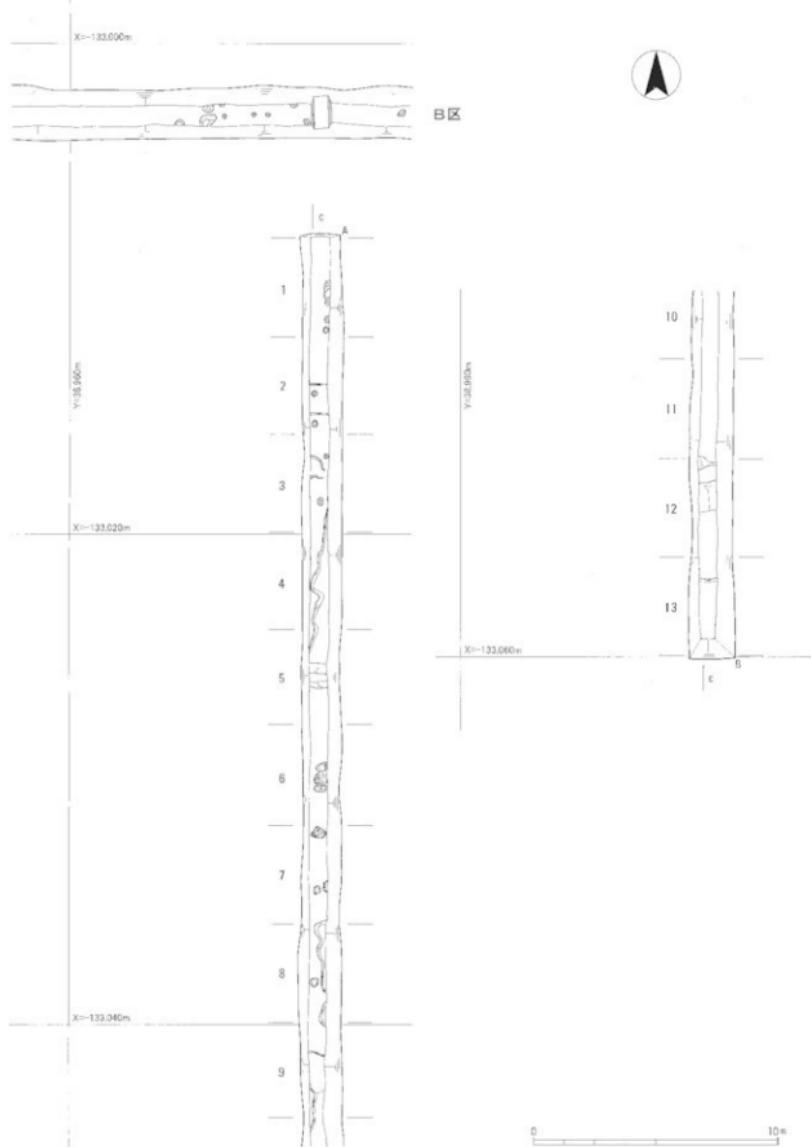


第9図 株本南方遺跡B区土層断面図② (1:100)

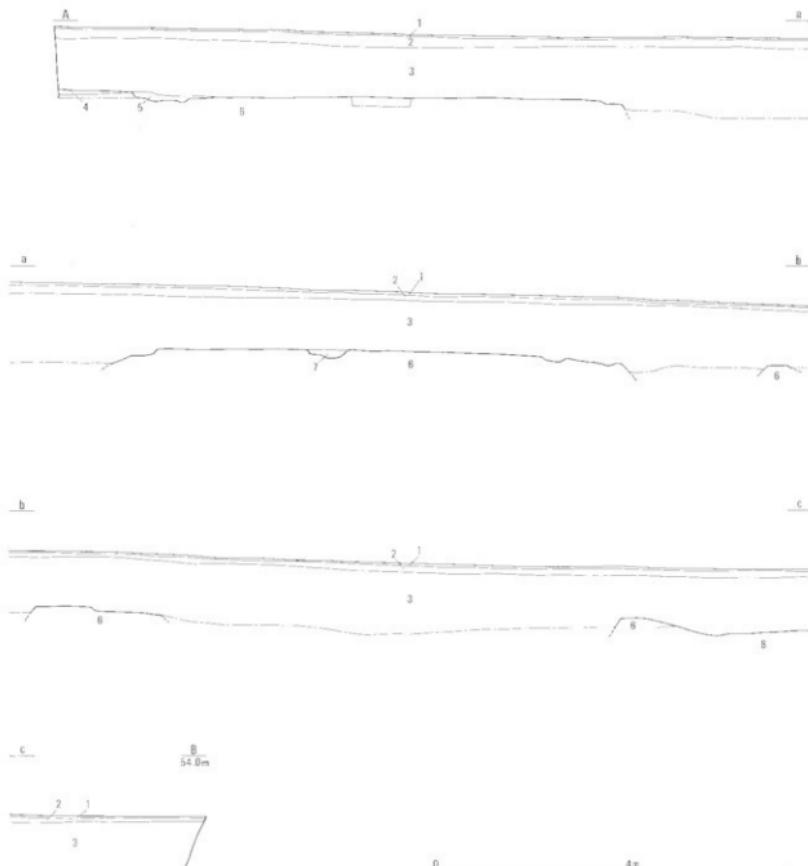


- | | | |
|------------------------------------|--------------------------|----------------------------|
| 1 青瓦アスファルト<5PG 6／1> | 7 民土<N 4／> | 13 喀綠灰土<1 OG 4／1> (SK2 地土) |
| 2 青灰砂岩<DB 5／1> | 8 泥質鈣砂岩<1 0 YR 5／2> (道路) | 14 灰色土<7, 5Y 5／1> |
| 3 橙色粘土<7, 5YR 6／8> (客土) | 9 黄色土<7, 5YR 4／4> (道路) | 15 黑色粘土<8 1, 5／> |
| 4 黄褐色土<1 0 YR 5／6> (検出面) | 10 黑色土<8 2／> (道路) | 16 綠灰粘土<5G 5／1> (SH1 地土) |
| 5 浅黄土<2, 5Y 7／3> (SH0 + 4, SH5 地土) | 11 灰黄色土<2, 5Y 7／2> (道路) | 17 明赤褐色土<5YR 5／6> (検出面) |
| 6 喀綠土<8 3／> | 12 浅黄砂質土<2, 5Y 7／4> (道路) | |

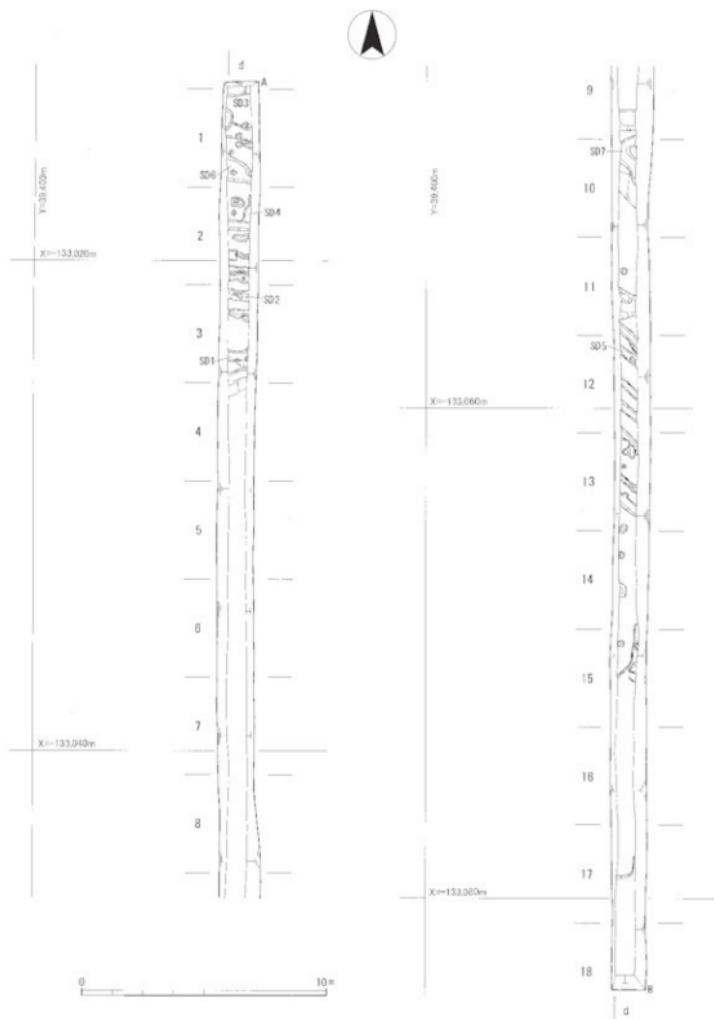
第10図 株本南方遺跡B区土層断面図③ (1:100)



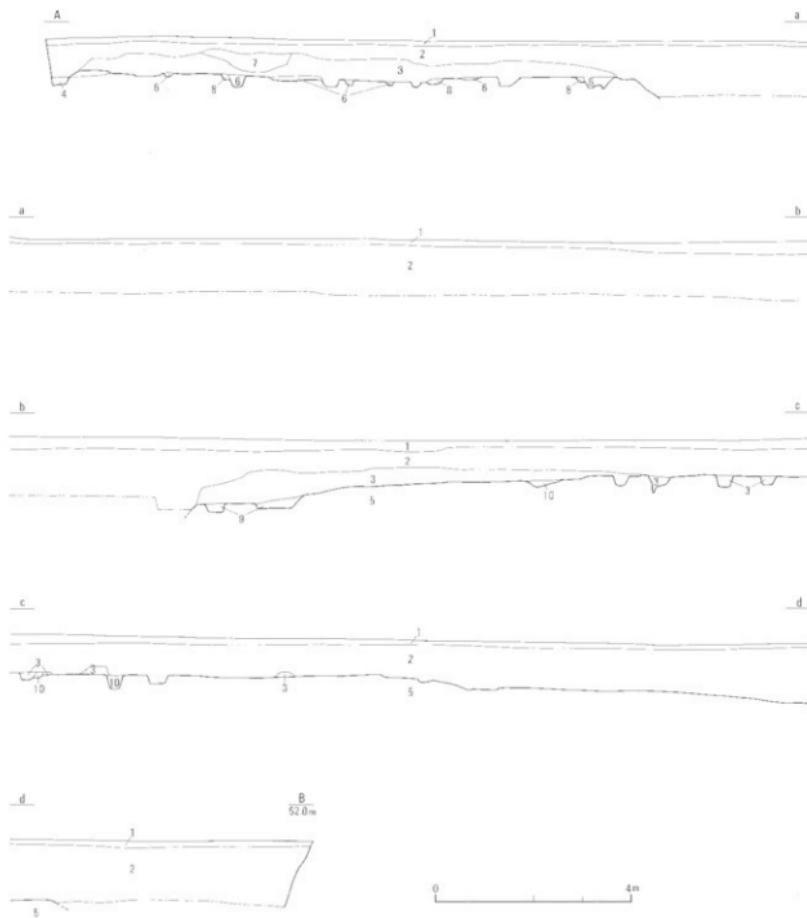
第11図 棕本南方遺跡C区遺構平面図 (1:200)



第12図 桂本南方遺跡C区土層断面図 (1:100)



第13図 松山遺跡D区遺構平面図(1:200)



- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 1. 黄褐色風化<1.0m 5/3>(表土)(SD 5風土) | 6. オリーブ褐色<2.5Y 4/4> |
| 2. 線<7.5Y 6/8>(客土) | 7. 黒<1.0m 2/1> |
| 3. 深オリーブ<5Y 5/2>(山耕作土) | 8. 黄褐色<1.0m 5/8>(SD 1・6風土) |
| 4. 黑褐<5YR 2/1>(SD 風土) | 9. 黄褐色<2.5Y 6/1>(SD 7風土) |
| 5. 明黄褐色<1.0m 6/8>(横出面) | 10. オリーブ黒<7.5Y 3/1> |

第14図 松山遺跡D区土層断面図(1:100)

4 松山遺跡D区

D区も農道に沿うパイプラインの埋設箇所に設置した。基本層序は現況地盤の上から、表土、盛土、旧耕作土、明黄褐色で、検出面の明黄褐色は、地表よりおよそ70cmの深度である。北部では、旧耕作土が残存しており、その直下が検出面となる。SD 3からは須恵器、山茶椀、中世以前の土師器の小片が出土している。黒褐色の埋土であり、中世以前の遺構と考えられるがその性格は判断できない。またロクロ土師器の小片が出土した小穴群は、間隔1~2mで一線上に列をなしており、建物の柱跡があるいは柵と考えられるものの、掘形が不揃いで疑問も多い。

SD 5からは古墳時代以前の土師器の小片が出土している。しかし北西から南東に同じ方向に向かう溝が複数並走しており、その埋土はSD 5を含め、旧耕作土と同じであるため、耕作に伴う溝とみられる。SD 1では山茶椀が、SD 4から縄文土器と山茶椀が、SD 6からは縄文後期の土器が出土している。埋土は耕作土ではないものの、どれもが東西に延びる同方向の溝で、SD 2から近代以降の瓦が出土していることから、近代以降の耕作に関連するものと考えられる。また包含層からは山茶椀、奈良・平安時代の須恵器、表土から灰釉陶器が出土している。

IV 遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代、奈良・平安時代~室町時代のものがあるが、平安時代~鎌倉時代前半の土師器、陶器（山茶椀）が多くを占める。また、大半は遺構検出時に出土し、明らかに遺構に伴うものは少ない。

1 棕本南方遺跡A区出土遺物

1は土師器の椀としたが、全体的に摩耗が著しく、ロクロ土師器の可能性も残る。2~11は土師器皿で、口径15cm弱の大型と9cm弱の小型のものがある。大型のもののうち2は口縁部を2段に強くヨコナデする。県内では中勢地域を中心に分布するもので、12世紀後半から13世紀初頭のもの^②とされている。小型のものには内弯して立ち上る口縁部をもつもの(4~8)と底部から屈曲して立ち上る口縁部をもつもの(9~11)があり、後者は器高の高いもの(9)と扁平なもの(10~11)に分かれる。9は口縁部内面に煤の付着があり、灯明皿として使用された可能性がある。これらの小型皿も2と同様な時期と考えられる。14~16は土師器鍋の口縁部片で、小片で全体の形態が明確なものはない。口縁部の形態はいずれも第1段階で12世紀後半から13世紀前半のもの^②とする。なお、14と16は同一個体の可能性がある。12はロクロ土師器、13は黒色土器A類で両者とも椀である。いずれも小片であり平安時代後半とするに止める。17は緑釉陶器椀であるが、剥離及び摩耗が進んでい

る。硬質に焼けているが橙色を呈する。18~21・26は灰釉陶器で、18~20は椀、21は蓋である。18の口縁部は外反し、灰釉は漬け掛け、19・20の高台は三日月状である。これらはK-90号窯式の後半と考えられ10世紀前半に相当する^③。26は高台の幅がやや広く、断面が三角形状を呈しており、百代寺窯式の後半と考えられ11世紀前半に相当する^④。22~29は山茶椀である。22・23の口縁部は外反しているが、24は直線的である。高台についても27は高く整然としたものであるが、28・29が低く潰れたものとなる。山皿と呼ばれる25の高台は消失している。これらから第5型式のものと第7型式前後のものが混在しているものと思われ、前者は13世紀前後、後者は13世紀中頃^⑤となる。

2 棕本南方遺跡B区出土遺物

30は土師器皿で、口径9cmのB形態となり、15世紀中頃のものである。31は台付皿か椀で、内外に煤が付着している。平安時代後期と思われる。32・33は山茶椀である。外反する口縁部や比較的高く整然とした高台から第4型式で12世紀後葉のもの^⑥となる。34は灰釉陶器で、高台が三日月状を呈し、K-90号窯式の後半と考えられ10世紀前半に相当する^⑦。

3 棕本南方遺跡C区出土遺物

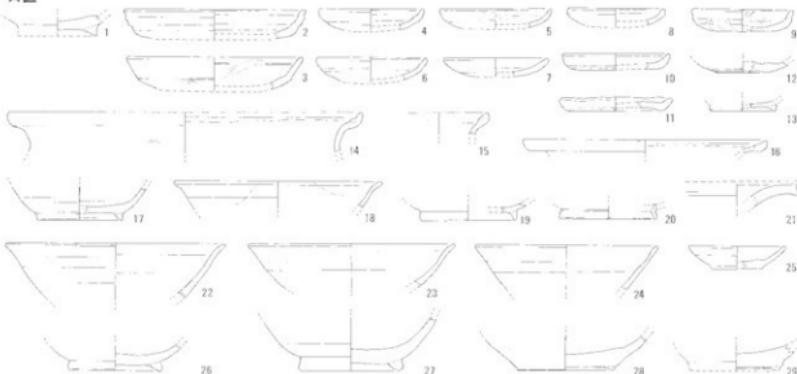
35は土師器の羽釜の小片、36は陶器の皿と思われ、

36 の内面に墨痕状の痕跡があるが、明確ではない。

4 松山遺跡D区出土遺物

37は縄文土器深鉢の口縁部である。波状口縁を呈し、山の部分が注口状の把手となる形態は東庄内A遺跡出土の79^①と同類と考えられる。山の部分が当遺跡出土の37は低く、磨消繩文の構成に若干の相違があるものの、東庄内A遺跡と同様、縄文時代後期初頭と考えられる。38は土師器鍋の小片で、第1段階^②、39は山皿で第5型式^③となり、いずれも12世紀末前後である。40、41は山茶碗で、40の高台には初期痕痕が多く、体部はやや丸みをもって立ち上がる。第4～5型で12世紀後半のもの^④である。41の高台は雑に張り付けられ、一部は体部の側面に及んでいる。これは第6型式で13世紀前半のもの^⑤である。

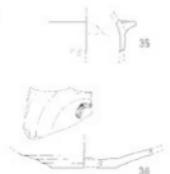
A区



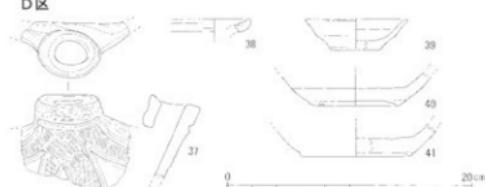
B区



C区



D区



第15図 出土遺物実測図 (1:4)

[註]

- ① 伊藤裕信「中北勢地域の中世土器」『三重県史 資料編 考古2』2005年
- ② 伊藤裕信「中世南伊勢の土師器に関する一試論」『The history vol. 1』三重歴史文化研究会 1990年
- ③ 齋藤孝正「越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器」『日本の美術』2000年
- ④ 藤澤良輔「総論」『愛知歴史 別編 中世・近世窯口系 実業2』2007年
- ⑤ 前掲④と同じ
- ⑥ 伊藤裕信「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史 資料編 考古2』2005年
- ⑦ 前掲④と同じ
- ⑧ 日本道路公团名古屋支社・三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財調査報告書』1970年
- ⑨ 前掲④と同じ
- ⑩ 前掲④と同じ
- ⑪ 前掲④と同じ
- ⑫ 前掲④と同じ

番号	表面形 状	目立 て る 特徴	地 質	基層 土 (100mm 深さ)	上 部 土 (100mm 深さ)	調査目的の特徴	色 調	鉢土	現存度	備 考	
1	B-1	3-10 砂土	—	土質砂 土	—	表面ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残			
2	4-9	3-9 包含層	—	土質砂 土	14.9	— 外露ナ イフ	灰褐色オサニ、ナ ダ、内露ナ イフ	灰褐色(10YR5/3) 中含セ、含 水多く生	0.5mの石含 量53/12残		
3	6-1	4-6 包含層	—	土質砂 土	14.4	—	ナ ダ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	軽微傷、工具痕	
4	5-2	A-2 304	土質砂 土	8.6	—	ナ ダ	灰褐色(10YR5/3)	中含セ	0.5mの石含 量53/12残		
5	4-8	4-13 包含層	—	土質砂 土	9.2	— 外露オサニ、ナ ダ、内露 ナイフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	表面内面ともに溝連保有。		
6	5-8	4-13 砂土	—	土質砂 土	9.1	—	ナ ダ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残		
7	4-9	4-6 411	—	土質砂 土	8.6	— 外露ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	中含セ	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に剥落、複数のため調査不明確。	
8	4-9	A-2 304	土質砂 土	8.0	—	ナ ダ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残			
9	5-4	4-9 包含層	—	土質砂 土	8.3	— オサニ、ナ ダ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食		
10	5-5	A-2 304	土質砂 土	8.8	— 外露オサニ、ナ ダ、内露 ナイフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食			
11	5-9	4-19 包含層	—	土質砂 土	8.2	— 外露オサニ、ナ ダ、内露 ナイフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。		
12	6-6	4-6 包含層	—	ロクロナ イト質砂 土	—	底 性 4.4	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	底部外面に赤斑。	
13	3-3	A-24 包含層	—	湖田土 質砂 土	—	高 含 5.4	ナ ダ、内露ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残		
14	6-4	4-7 包含層	—	土質砂 土	29.2	—	外露ナ イフ	内 外 灰褐色 7.0	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
15	4-2	4-12 包含層	—	土質砂 土	—	— ナ ダ	内 外 灰褐色 7.0	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。		
16	4-4	A-2 304	土質砂 土	26.0	—	外露オサニ、ナ ダ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残			
17	4-1	3-14 包含層	—	高 含 7.0	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3) 内 外 灰褐色 7.0	0.5mの石含 量53/12残	底部外面に赤斑。		
18	7-5	4-15 包含層	—	灰褐色 陶 器 地	17.0	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
19	7-6	3-10 包含層	—	灰褐色 陶 器 地	—	— ナ ダ	内 外 灰褐色 7.0	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。		
20	7-7	3-17 包含層	—	灰褐色 陶 器 地	—	— ナ ダ	内 外 灰褐色 7.0	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。		
21	7-2	3-14 包含層	—	灰褐色 陶 器 地	17.0	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3) 内 外 灰褐色 7.0	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
22	7-4	3-15 砂土	—	山東 陶 器 地	18.0	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
23	7-1	3-1 包含層	—	—	17.0	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
24	1-1	3-8 311	山東 陶 器 地	14.1	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。		
25	7-2	3-15 砂土	—	山東 陶 器 地	8.6	1.9	— コロナ イト	灰褐色(10YR5/3) 内 外 灰褐色 7.0	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
26	1-3	3-20 包含層	—	高 含 7.2	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの砂粒若干 含	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
27	1-2	3-12 砂土	—	高 含 7.2	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの砂粒若干 含	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
28	2-2	3-15 包含層	—	高 含 7.4	—	コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの砂粒若干 含	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
29	3-1	3-25 包含層	—	高 含 7.0	—	— ナ ダ	内 外 灰褐色 7.0	0.5mの砂粒若干 含	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
30	6-2	3-40 304	土質砂 土	11.3	—	— ナ ダ	内 外 灰褐色 7.0	0.5mの砂粒若干 含	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
31	3-7	4-47 305	土質砂 土/砂 利	—	高 含 10.0	— ナ ダ	内 外 ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
32	2-8	B-6 砂土	—	—	15.0	— ナ ダ	内 外 ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
33	9-1	3-2 包含層	—	山東 陶 器 地	18.0	— ナ ダ	内 外 ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
34	2-1	B-16 砂土	—	灰褐色 陶 器 地	—	高 含 7.4	— コロナ イト	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
35	4-7	C-2 砂土	—	—	— ナ ダ	—	— ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に内面腐食。	
36	4-6	C-4 包含層	—	高 含 6.4	—	底 性 4.4	コロナ イト	内 外 灰褐色 6.4 内 外 灰褐色 6.4	0.5mの石含 量53/12残	内面に黒苔有り。	
37	8-3	B-1 306	湖 田 土	—	— ナ イフ	—	— ナ イフ、内 露ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの砂粒若干	0.5m部に網状剥離有し。	
38	8-2	B-16 砂土	—	土質砂 土	—	— ナ ダ	— ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの石含 量53/12残	0.5m部に網状剥離有し。	
39	3-2	B-1 305	湖田 土	—	8.6	2.5	— ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの砂粒若干	0.5m部に内面腐食。	
40	2-3	B-1 305	湖田 土	—	高 含 8.1	—	— ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの砂粒若干	0.5m部に内面腐食。	
41	3-3	B-9 305	湖田 土	—	高 含 8.0	—	— ナ イフ	灰褐色(10YR5/3)	0.5mの砂粒若干	0.5m部に内面腐食。	

第1表 遺物観察表

V 結語

椋本南方遺跡において、昭和62年度の1次調査では平安時代前期と鎌倉時代前期の掘立柱建物が検出され、奈良時代や平安時代前期の堅穴住居も多数検出されている^①。一方、平成4年度の2次調査では、平安時代末と鎌倉時代前半の掘立柱建物が検出されている^②。2次調査の範囲は、1次調査の範囲よりやや北側である。このため当遺跡では奈良時代に安濃川に近い段丘上に集落が形成されはじめ、鎌倉時代前期に安濃川からやや離れた段丘上まで集落が広がったものと考えられている^③。今回の調査区は、1次調査区よりやや南側にあたり、椋本南方遺跡の南端にあたる。また検出された遺物は奈良時代一鎌倉時代前半のものが主で、1次調査と2次調査の結果と同様であるものの、集落跡等の検出には至らなかつた。それは、どの調査区も検出面の幅が約80cm程度のトレンチ状であることに加え、検出面も後世の擾乱によって削平され、本来の検出面ではない部分がほとんどであったためということが想定される。また今回の調査においても、室町時代の遺構は検出されず、出土遺物も若干である。これは安濃川の氾濫等により、人々は徐々に段丘低位置から高位置へと移動するという従来の考え方を肯定する結果である。そして現在の椋本宿の位置で落ち着くこととなり、今に至るようになったのではないだろうか。

一方、松山遺跡においても生活場所の移動はあつたようである。昭和62年の1次調査で9~10世紀と12世紀前半の遺構や12世紀後半の遺構が確認されている^④。そこから分かることとして、時代を経るとやや東へ移っており、これも安濃川から少し離れる方向での移動である。注目されるものとして、松山遺跡では等間隔で平行している2本の溝^⑤がある。この溝を側溝とする直線道路が平安時代前期に成立したと見られる古道と考えられている。当地では、以前から古道が通っていたと想定されていた^⑥が、約330mの直線道路は三重県内で確認されている道路遺構としては最大級の規模である。また、道路遺構の延長上にあり、椋本南方遺跡と松山遺跡の間に所在する馬屋町遺跡の小字が「馬屋町」である。さらに、

松山遺跡には「大門」、松山遺跡の北段丘上に「追上」という小字が残されているが、これらも駅路に由来すると考えられる。

今回の調査区はこの道路遺構から南へ外れるため、古道や駅路に関連することを示す遺構は検出できなかつたが、椋本南方遺跡からは、縁袖陶器や灰釉陶器が出土するなど、この地は都と伊勢神宮を結ぶ一つの要地であったということは十分考えられるのである。

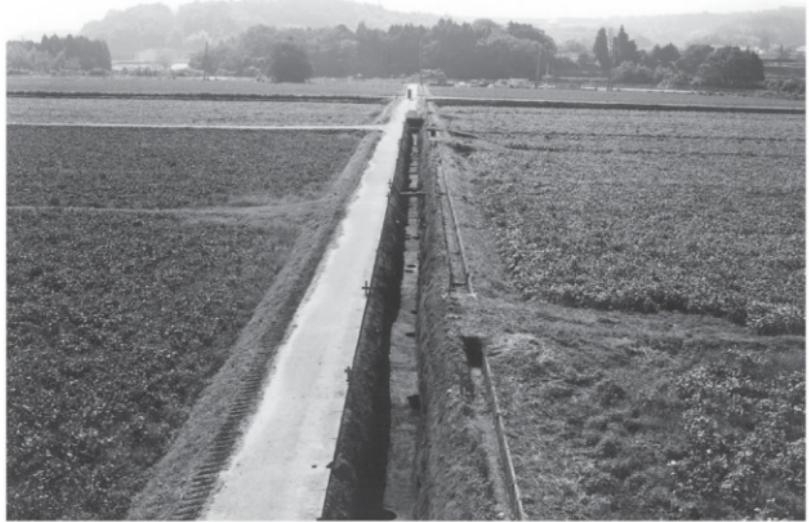
そのほか、縄文時代に関して、松山遺跡D区から後期の小片が出土している。また、椋本南方遺跡では、2次調査で、中期の小片が4点出土している。同じ安濃川左岸上流で、椋本南方遺跡の北西に位置する大石遺跡では中期の縄文土器を中心として、終末期までの土器が出土している^⑦。松山遺跡では、これまでに出土の例がなく、中期の大石遺跡と椋本南方遺跡の関連を考えても、後期の土器が出土したこととは、安濃川左岸での後期の活動範囲等を考える上で注目される。

[註]

- ① 三重県教育委員会『安濃郡芸濃町 椋本南方遺跡』1988年(現地説明会資料)
- ② 三重県埋蔵文化財センター『安濃遺跡・椋本南方遺跡』1993年
- ③ 前掲②と同じ
- ④ 三重県教育委員会『芸濃町萩野 松山遺跡-C-』1987年(現地説明会資料)
- ⑤ 三重県『三重県史 資料編 考古2』2005年
- ⑥ 上田正順『探訪 古代の道 第二回』法藏館 1998年
- ⑦ 三重県埋蔵文化財センター『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告-第1分冊-』1992年



棕本南方遺跡 A 区調査前風景（南から）



棕本南方遺跡 A 区全景（北から）

写真図版 2



棕本南方遺跡B区調査前風景（東から）



棕本南方遺跡B区全景（東から）



棕本南方遺跡C区調査前風景（北から）



棕本南方遺跡C区全景（北から）

写真図版 4



松山遺跡D区調査前風景（北から）



松山遺跡D区全景（北から）



棕本南方遺跡 A 区小穴群（北から）



棕本南方遺跡 B 区小穴群（西から）

写真図版 6



松山遺跡D区小穴群（南から）



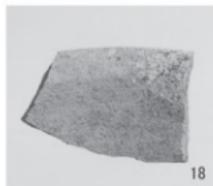
37



17



27



18



26



39

出土遺物

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告332
椋本南方遺跡(3次)・松山遺跡(2次)発掘調査報告
2012(平成24)年12月

編集　　三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷　　(有)ミフジ印刷
